

フローベールの自伝系列作品等に みるフェティシズムの影

——『感情教育』¹を中心として——

高 砂 伸 邦

目 次

1. 序	128
2. 自伝系列作品等にみる女性の足／履物に関する描写	129
2.1. 定義	129
2.1.1. 足／履物	129
2.1.2. フェティシズム	129
2.2. 足／履物に関する描写	130
2.2.1. 空想の描写	130
2.2.2. 回想の描写	136
2.2.3. 眼前の描写	141
2.2.3. (1)舞踏会の描写	142
(2)フレデリックの愛人たちの描写	146
—— アルヌー夫人以外の三人 ——	
(3)アルヌー夫人の描写	149
3. “書簡” にみられる女性の足／履物への言及	160
4. 結び	168

1. 序

『感情教育』はフローベールの自伝的作品系列の到達点とされている。その終わりから2番目の章（第3部、第6章）は、主人公のフレデリックとヒロインのアルヌー夫人の最後の別れを描いた章であるが、そこで、アルヌー夫人が自分の白くなった髪をひと房切り取りフレデリックに与えて立ち去る前の、2人の会話のなかにフレデリックの次の台詞がある：——《La vue de votre pied me trouble.》²（あなたのその足を見るとたまらなくなるんです）³。これは16年振りの⁴再会の場面で、フレデリックはこのとき45歳になっているはずである⁵。アルヌー夫人の年齢については作中具体的な記述がないとはいえ、関連する文脈は明らかに夫人が彼よりかなりの年上であることを示している⁶。この台詞は何を意味するのであろうか？

翻って、『感情教育』の他の箇所ではアルヌー夫人の足あるいは履物（上記の“足”は、その直前の記述から“短靴に包まれた足”である）に関しどのような描写がなされ、それらにはどのような特徴が認められるであろうか？ アルヌー夫人以外の登場女性たちについてはどうであろうか？ また、他の自伝的作品と言われる『初稿感情教育』、『十一月』、『狂人の手記』、および告白・自省のノートともいわれる『思い出・覚書・冥想』、さらに遡ってこれら以外の初期の作品⁷ではどうであろうか？ いま便宜上これらの諸作品を纏めて“自伝系列作品等”と仮称するとして、そこに女性の足あるいは履物にたいするフェティシズムが認められると言えるであろうか？ 一方、フローベールはその生涯にわたり膨大な数の書簡を残しており⁸、我々はそこに彼の肉声を聞くことができるという幸運に恵まれているのであるが、そこではどのような言及がなされているであろうか？

以上の観点から、女性の足あるいは履物に関し、“自伝系列作品等”に

における描写のフェティシズムとのかかわり具合を『感情教育』を軸に据えつつ検討し、あわせ書簡中にみられる言及について考察してみたい。

2. “自伝系列作品等” にみる女性の足／履物に関する描写

2.1. 定義

2.1.1. 足／履物

フローベールはこれらの作品において、“pied”を“素足”のほか上記のように“履物に包まれた足”の意味でも使用している。また、素足を“pieds nus”と明示している箇所もある。一方、履物としては、bottines (踝の上まである深靴), pantoufles (部屋履き), chaussures découvertes (足のあらわに見える短靴), escarpins (舞踏靴), babouches (トルコ風スリッパ), souliers (短靴) 等がでてくるほか、足あるいは履物に関連する表現——足指、踵など——もある。本稿ではこれらも検討の対象に含め、全体を纏めて言う場合には、これを“足／履物”と表示することとする。

2.1.2. フェティシズム

精神医学上の定義では、“異性の身体の一部(陰毛、毛髪、乳房、手足など)や相手が身につけていた物品(下着類、靴、手袋、ハンカチなど)を集めたり、触れることによって性的快感をおぼえるもので、性対象の倒錯の一型である”となっている(“精神医学大事典” p.755, 講談社, 1984)。また、Le Petit Robert も医学的定義として“通常性的意味を持たない物品にたいして、触覚あるいは視覚によって性的満足を求めようとする性的倒錯である”としている。両者の間には若干の相違はあるが、性的快感につながるものとする点では共通している。これに対し、広辞苑の与える定義はより一般的なもので、“性的倒錯の一種、異性の衣類、

装身具などに対して、異常な愛着を示すこと” というものである。これはその愛着の程度が通常の範囲を越えるものを指すが、必ずしも具体的に性的快感を求める段階にまで至るとは限らない、とも読み取れる内容のものである。

2.2. 足／履物に関する描写

足／履物に関する描写は、その内容から、当人が足／履物のことを空想のうちに思い巡らせているケース、回想のうちに思い起こしているケース、及び眼前の足／履物を注視しているケースの3種類に分類することができる。それらが性的快感への繋がりを明示し、或いは暗示していると見做されうるかどうかが対医学的定義とのチェックポイントとなろうし、各々その空想の広がり具合、回想の鮮明度そして眼前の注視の度合い如何が一般的定義に対し照らし合わせるべき材料となるであろう。

2.2.1. 空想の描写

『感情教育』の足／履物に関わる最初の描写は空想のものである。第1部、第1章で、大学入学を前に、遺産相続を受ける可能性のあるル・アーヴルの叔父を訪ねたフレデリックが、故郷ノジャン・シュル・セーヌへの帰路、パリのサン・ベルナール河岸から乗った蒸気船の船上でアルヌー夫人を初めて見る。コレージュ時代に自分の詩的天空に輝いていた通りの女性の出現に感動した彼は、夫人の全てを知りたいという激しい好奇心に駆られる。黒人女中を連れていることから夫人をクレオールかと想像し、後ろの船縁の上に掛けられた長い肩掛けをみて、次のような空想を巡らす：

Elle avait dû, bien des fois, au milieu de la mer, durant les soirs

humides, en envelopper sa taille, *s'en couvrir les pieds*, dormir dedans. (p.7)

湿気の多い海上でそのショールにくるまって幾夜も眠ったことであろうという想像のなかで、それに覆われた体の部分として夫人の足がフレデリックの頭にイメージされている。

空想の描写の2番目は、フレデリックが靴屋の陳列ケースの中の部屋履きを見て、アルヌー夫人の足を連想する場面のものである。第1部、第5章で、学生の街頭デモを見物中に知り合った新聞記者ユソネの紹介で、漸くアルヌー家恒例の木曜日の晚餐に招待されるようになったフレデリックであるが、アルヌー夫人に会えば会うほど恋の切なさは増すばかりで、通りで行き交う女性をみては夫人を思い出し、店に並べられているカシミヤ、レース、イヤリング等をみては夫人が身につけるさまを夢想する仕儀となる：

A l'éventaire des marchandes, les fleurs s'épanouissaient pour qu'elle les choisît en passant; *dans la montre des cordonniers, les petites pantoufles de satin à bordure de cygne semblaient attendre son pied*; (p.68)

この場面の原型ともいえる場面が『十一月』の中にある。“ぼく”が初めて女性体験をした相手の娼婦マリーに裏を返しに行ったとき、彼女に語って聞かせた“ぼく”の昔の話の中に出てくるものである：

[…]; l'étalage d'un cordonnier me tenait aussi en extase: *dans ces petits souliers de satin, que l'on allait emporter pour le bal du soir, je plaçais un pied nu, un pied charmant, avec des ongles fins,*

*un pied d'albâtre vivant, tel que celui d'une princesse qui entre au bain;*⁹

これらは共に、陳列されている履物をみて、それに入れるべき足に思っていたっている。両者の相違点は、前者では主語の部屋履きが喚起させる空想という形をとり、その形状描写のあと足については簡略に“あの人の”と言うに止めているのにたいし、後者では“ぼく”がいわば能動的に思いを巡らせ、短靴の材質、使用目的のあとに、足に関して爪をも含め、その形、色合い、様態などの具体的な描写があり、さらに“うっとりと見惚れていた”¹⁰という直截な告白¹¹があることである。

空想の描写の3番目は、同じく第1部、第5章で、フレデリックが踊り場アルハンブラで耳にする恋歌の歌詞からアルヌー夫人の足を連想する場面のものである。ここでフレデリックは、アルヌーとアルヌーに愛人口ザネットを仲介した“便利屋”ヴァトナ嬢の2人が落ち合っているのに遭遇する。踊りが止んで、ヴァトナ嬢お目当ての歌手デルマス¹²が哀れっぽくロマンスを歌いはじめる：

Les paroles rappelèrent à Frédéric celles que chantait l'homme en haillons, entre les tambours du bateau. *Ses yeux s'attachaient involontairement sur le bas de la robe étalée devant lui.* Après chaque couplet, il y avait une longue pause, — et le souffle du vent dans les arbres ressemblait au bruit des ondes. (p.72)

この箇所には足／履物に関する単語そのものは出ていないが、目の前に広がるドレスの裾に無意識的に据えつけられたフレデリックの視線は、その下に隠されているはずの足を求めており、しかもその足とは冒頭の船旅のあとで彼の記憶に蘇った、蒸気船上でドレスの下からちらっとその

姿を見せたアルヌー夫人の“深靴に収まった小さな足”（“回想の描写”の項参照）であるということは明らかである。“外輪の間に歌う檻樓をまとった男”は船上でのアルヌー夫人との出会いの場に登場しているからである。ところで、いま彼の目前にあるドレスの女性とは、背丈、顔立ち、目の色、雰囲気、足の可愛らしさ、のいずれにおいてもアルヌー夫人とは似ても似つかぬヴァトナ嬢なのであるが、歌詞に触発され記憶回路が瞬時につながり、回想から空想へと彷徨いだすフレデリックにとり、素材となる女性はいわば誰でも構わないわけで、彼にとっては周りの木々の間をぬう風のそよぎがああの時のセーヌ川の波音にも似て聞こえるだけなのである。

『感情教育』以外の自伝系列作品等における空想の描写としては、『初稿感情教育』のなかに主人公のアンリが下宿先の女主人ルノー夫人のことを夢想する次の場面がある：

Il eût voulu que la longue bergère de tapisserie où elle s'asseyait dans la journée eût été faite exprès pour elle et donnée par lui; *que le tapis où elle marchait pieds nus, un autre n'y jetât pas les yeux*;¹³

夫人が素足で歩く絨毯に他の誰も目をやって欲しくない、という秘めやかな情念を窺わせる表現である。場面が室内の絨毯から海岸の波打ち際になると、マリアことアルヌー夫人として理想化されたエリザ・シュレザンジェの足跡を波が消し去るのを見て、涙を流さんばかりになったというくだりが『狂人の手記』のなかに出てくる（“回想の描写”の項参照）。足／履物と絨毯の接触面を視覚あるいは聴覚でとらえている場面については“回想の描写”および“眼前の描写”の項でも触れるが、これは自伝系列作品等に散見されるパターン化された場面¹⁴の一つに数える

ことができるものである。同じく、『初稿感情教育』のなかで、アンリがブローニュの森で行き交う豪華な幌付き四輪馬車のなかの貴婦人達を見て空想を巡らせる次の文は、そのヴァリエーションの一つとみなされよう：

[…]; il se figurait les salons où elles allaient, le soir, décolletées, en diamants, avec des fleurs, les oreillers garnis de dentelles où elles posaient leur tête, les grands parcs qu'elles avaient l'été, et *les allées sablées où marchaient leurs pieds*.¹⁵

思い描かれているものはサロン、枕、大庭園、小径の4個であるが、小径だけがその形容節の主語が *elles* から *leurs pieds* に変わっているところに作者の意図が感じられる。一方、『思い出・覚書・瞑想』には履物に関連する次のような空想の告白がある：

Il y a huit jours *j'ai pensé deux heures à deux brodequins verts* …et à une robe noire: sans ajouter rien de plus de niaiseries qui me tiennent le coeur attaché longtemps je baguenaude dans ma tête, je me chatouille pour me faire rire, je me fais des tableaux dont je suis le spectateur, des tableaux avec des horizons roses, un beau soleil — tout y est bonheur, rayonnements.¹⁶

自分の気持ちが長いあいだ引きつけられる下らない物¹⁷、が他にもいくつかあることを認めつつも、それらは加えずに、2個の緑色の編み上げ靴と1着の黒いドレスだけから、バラ色の地平と美しい太陽で幸せと光に満ちあふれる空想画を、2時間にわたり喜々として頭のなかで描き続けたというのである。

また『狂人の手記』の中にはマリアの足についての空想を次のように回想するシーンがある：

Un rien, un pli de sa robe, un sourire, *son pied*, le moindre mot insignifiant m'impressionnaient *comme des choses surnaturelles*, et j'avais pour tout un jour à en rêver.¹⁸

まるでこの世のものとも思えぬほどに“ぼく”の心を揺り動かし、夢見心地のうちに思い起こして丸一日を過ごしたものの、として彼女のドレスの襞ひとつ、ちょっとした微笑み、意味もないほんの一言、とともに彼女の体の部分として足が想起されている。

上の2つのケースは、2時間あるいは丸一日と、空想に費やした時間の長さからその特異性が注目されるものであるが、次の2個の表現はその内容そのものから“ぼく”が女性の足に対して抱く、特異なまでの思い入れのほどを示しているという点で注目されるものである。その一つは、『思い出・覚書・瞑想』のなかで、女性を愛すること、女性から愛されることへの渴望を告白した箇所で：

O comme j'aimerais! Venez donc, venez donc, âme mystérieuse soeur de la mienne, *je baiserais la trace de vos pas*, tu marcheras sur moi et j'embrasserais tes pieds en pleurant.¹⁹

他の一つは『狂人の手記』のなかで、マリアを初めて見た保養地トルーヴィルをその2年後に訪れて、今はもういない彼女と空想上の再会をはたした“ぼく”が、マリアに次の如く呼びかける箇所である：

Où vais-je? que serai-je? je voudrais être vieux, avoir les

cheveux blancs; non, je voudrais être beau comme les anges, avoir de la gloire, du génie, et *tout déposer à tes pieds pour que tu marches sur tout cela*;²⁰

両者とも、理想の女性に、自分の体の上を、或いはそれに自分の栄光、才能など一切合切を含めた全体の上を、踏み歩いて欲しいと願う自己犠牲的な気持ちの表白であるが、同時に、これらの文章から伝わってくるのは被虐趣味的な匂いであり、それは“あなたの足跡に接吻し、涙に咽びつつあなたの足をかき抱くであろう”という前者で特に濃厚である。

2.2.2. 回想の描写

『感情教育』における回想の描写の最初のものは、第1部、第1章で、蒸気船をシュルヴィルで下船したフレデリックが、出迎えの馬車でノジャン・シュル・セーヌに戻る途中でル・アーヴルまでの旅を回想する場面のなかに登場する：

[…], tout son voyage lui revint à la mémoire, d'une façon si nette qu'il distinguait maintenant des détails nouveaux, des particularités plus intimes; *sous le dernier volant de sa robe, son pied passait dans une mince bottine en soie, de couleur marron*; la tente de coutil formait un large dais sur sa tête, et les petits glands rouges de la bordure tremblaient à la brise, perpétuellement. (p.10)

新しく思い浮かんでくる細々した事柄、より親密感を抱かせる特徴、として船上でのアルヌー夫人の足と夫人の頭上を覆っていたテントが想起されている。テントは彼がそこに行ったとき食事をおえた夫人が読書の

ためにもどっていた場所として、文中すでに言及されているが、夫人の足の記述はここで初めてでてくる。ドレスの一番下の飾りの下で動く、夫人の足を納める履物の種類、形状、色のみならず材質までもが鮮明に想起されている。

回想の描写の2番目のものは、第3部、第5章で、株券詐欺で告訴されたアルヌーが妻子ともどもパリを逃げ出したのち、夫人に署名させた銀行家ダンプルーズ宛て手形4通の債務不履行がもとで、アルヌー家の家具類、夫人の衣類、身の回り品等が競売にかけられる場面のものである：

Ainsi disparurent, les uns après les autres, *le grand tapis bleu semé de camélias que ses petits pieds mignons frôlaient en venant vers lui*, la petite bergère de tapisserie où il s'asseyait toujours en face d'elle quand ils étaient seuls; [...] C'était comme des parties de son coeur qui s'en allaient avec ces choses; (p.414)

空想の描写の項でみた、足／履物と絨毯の接触面を注視している場面の一つである。落札者が決まり、次々に隣室に運び去られる競売品のなかに、椿の花をあしらった青い大きな絨毯を見つけるフレデリックの脳裡に浮かぶのは、それに軽やかに触れながら自分に近づいて来たアルヌー夫人の“小さな可愛らしい足”であり、彼は“こういう品々といっしょに自分の心の部分が運びさらられていく心地”²¹を味わうのである。

『感情教育』以外の自伝系列作品等における回想の描写としては、『初稿感情教育』に郷里で税関吏見習いをしながら一人戯曲の勉強に取り組むジュールが、パリの大学に出た親友アンリに書く手紙の中に次のものが出てくる。ジュールが巡回してきた劇団の座長と知り合い一座の花形女優リュサンドに紹介された場面の回想である：

Elle [...] se tenait immobile, sans rien faire, occupée seulement à regarder *le bout de son pied, avec lequel elle battait le sol à petits mouvements saccadés; son soulier de satin blanc bruissait en s'ériflant sous sa robe, [...]*. Elle avait aussi des bas à jour, brodé sur les côtés, et *sa chaussure était si mince et si fine qu'on eût presque dit son pied nu, et plutôt ganté que chaussé, car il semblait flexible et doux comme une main.*²²

じっと動かず小刻みに床を打つ足先を見つめるリュサンドの視線を追って、ジュールの視線はドレスの下でさらさらと音をたてている彼女の白い繻子の短靴をとらえ、それがとても薄く華奢なため、彼女の足は素足かそれともむしろ手袋でもはめているかのように見えたほど、手のようにしなやかで柔らかく見えたというものであるが、これは足と履物の双方にまたがる詳細かつ鮮明な回想である。

さらに、『狂人の手記』には回想の描写が4カ所でてくる。その一つは、かつて“ぼく達”がよく訪ねた、ルーアンの街からさほど遠くない所にあったシャトーともいえるべき家に住んでいた、前世紀を思わせる年老いた女主人にまつわる回想である：

Je vois encore sa tabatière d'or pleine du meilleur tabac d'Espagne, son carlin aux longs poils blancs, et *son petit pied mignon, enveloppé dans un joli soulier à haut talon orné d'une rose noire.*…… (sic)

Qu'il y a longtemps de tout cela! La maîtresse est morte, ses carlins aussi, sa tabatière est dans la poche du notaire; le château sert de fabrique, *et le pauvre soulier a été jeté à la rivière.*²³

“いまでも目に浮かぶ”ものとして3個挙げられているうちの2個は、極上のスペインたばこが一杯に詰まった金製のたばこ入れと白い毛長の狎であり、身体に関わるものといえ、黒いバラ飾りのついた踵の高い綺麗な短靴に収まった年老いた女主人の“可愛らしい小さな足”なのである。

2番目の描写は、“ぼく”の妹の友達である寄宿学校生のイギリス人姉妹のうち、“ぼく”が魅了された“周りに若さの香りを発散させるととてもナイーヴな”²⁴ 姉、とその仲間たちにまつわる回想である：

Il me semble la voir encore à travers les vitres de ma chambre, qui courait dans le jardin avec d'autres camarades; *je vois encore leurs robes de soie onduler brusquement sur leurs talons en bruissant, et leurs pieds se relever pour courir sur les allées du jardin, [...]*.²⁵

彼女が仲間たちと庭を駆け回るのを部屋のガラス越しに眺めている“ぼく”の視線は、微かに聞こえる衣擦れの音と共に踵の上にぱっとひるがえる彼女たちの絹のドレスの裾とその足元に注がれていたのである。

3番目の描写は、トルーヴィルで、波打ち際に置かれてあった婦人用の素敵な赤いマントが上げ潮の波にさらわれそうになったのを、安全な場所に移してやったことがきっかけとなり、“ぼく”が“初めて心のときめきを覚え、ある新しい感覚として、なにやら異様なものを感じた”²⁶ マリアが海に入るのを毎朝見にいったときのものである：

Chaque matin j'allais la voir se baigner [...]; *je contemplais machinalement son pied se poser sur le sable, et mon regard restait fixé sur la trace de ses pas, et j'avais pleuré presque en*

*voyant le flot les effacer lentement.*²⁷

ここの描写は、海から上がってくるマリアの足が、その跡を砂浜の上に印していくのを“無意識のうちに”うっとりとし見惚れていた“ぼく”，そしてその足跡に釘付けにされていた“ぼく”の視線，そして波が足跡をゆっくりと消し去るのを見てほとんど泣きそうになった“ぼく”，と，接続詞 *et* を連ねた畳み掛けるような語調とともに，マリアの足にたいする“ぼく”の関心の強さが滲み出たものとなっている。ここで使われている *machinalement* といい，“空想の描写”の項でみた，フレデリックの視線が思わず目の前のヴァトナ嬢の裳裾に据えつけられる場面で用いられている *involontairement* といい，これら“無意識のうちに”という副詞は，まさにその使用そのものによって，“ぼく”あるいはフレデリックの意識下に潜む女性の足／履物に対する強い関心のほどを炙り出しているといえよう。この時，15歳の“ぼく”の視線を捉えて放さなかった“足跡”は，次の4番目の描写に見られるように2年後再び想起されたあと，4年後には“空想の描写”の項でみたように，接吻の対象に昇華しているが，さらにこれは35年後，50歳になったフローベールがエリザ・シュレザンジェ当人に対し手紙の中で回顧することになるものである。（3.“書簡”の項参照）

回想の描写の4番目のものは，“空想の描写”の項の末尾でみたトルーヴィル再訪のときのものである。2年の歳月の後，思い出という情熱のスクリーンを通して初めてマリアへの愛を実感する“ぼく”は，そこにいないマリアに向かって次のように呼びかける：

Et moi, sais-tu que je n'ai pas passé une nuit, pas un jour, pas une heure sans penser à toi, sans te revoir sortant de dessous la vague, avec les cheveux noirs sur tes épaules, la peau brune avec

ses perles d'eau salée, les vêtements ruisselants et *ton pied blanc aux ongles roses qui s'enfonçait dans le sable*, et que cette vision est toujours présente et que cela murmure toujours à mon coeur? Oh! non, tout est vide.²⁸

“ぼく”がいつも思い起こさずにはいられなかったもの、そして今もその幻影が目の前に浮かび“ぼく”の心に囁きかけてくるもの、として波間から上がってくるマリアの肩に垂れた黒い髪、真珠のような水滴をつけた褐色の肌、海水の滴り落ちる水着とともに、砂にめり込むマリアのピンク色の爪をもった白い足、が鮮やかに想起されている。回想の中で“ぼく”の視線はマリアの体を上から下へと順に移動していくのだが、最後の足のところでは歩く動作のなかに爪の色をも見て取っている。

また、『この香を嗅げ』《Un parfum à sentir》には次のような描写がある：

N'est-ce pas ses deux seins que vous avez dévoré de si ardents baisers? n'est-ce pas dans son regard si doux que vous avez bu la vie? n'est-ce pas dans les sourires que vous avez vécu? n'est-ce pas que *son pied mignon*, sa jambe si bien faite, étaient là sur votre lit à s'entrelacer dans les vôtres?²⁹

美人の女軽業師イザベラードに関する記述であるが、14歳のときの作品の閨房の描写に女性の身体の部分として乳房、脚とともに“可愛らしい足”が使われている。

2.2.3. 眼前の描写

『感情教育』における足／履物に関する眼前の描写は大別して2種類あ

る。一つは舞踏会³⁰で踊る女性たちの描写に出てくる足／履物への言及であり、他の一つは主人公フレデリックを愛した4人の女性の人物描写のなかに出てくるそれである。

2.2.3. (1)舞踏会の描写

舞踏会の描写は、第2部、第1章で、アルヌーの愛人ロザネットが自宅で催す、およそ60人が参加する仮装舞踏会の場面のものである。2年目の期末試験を終え休暇帰省したフレデリックは、母親から家計の窮状を訴えられノジャンに蟄居を余儀無くされるが、2年後、ル・アーヴルの叔父の遺産相続を得て、勇躍“外交官生活に入りやがては大臣になる”べく再度上京する。職業も住所も変わったアルヌー家を漸く探しあてたフレデリックがアルヌーに連れられこの舞踏会に行く。この場面で名前あるいは仮装のあだ名を挙げられている女性は、ロザネットの他スイス女、野蛮人の女、酒神巫女、ポーランド女、踊り子ルルー嬢、天使の女、スフィンクス頭の女、魚売りの女、荷揚げ人夫の女、ヴァトナ嬢、ジムナーズ座女優のヴァンダル夫人、デロジ医師の妻の13名であるが、このうちロザネット、スイス女、酒神巫女、ポーランド女、ルルー嬢、荷揚げ人夫の女、の6名に足／履物の描写がある。

ヴェニス総督風真紅の絹の長衣をまとった年配の伊達男と踊っているロザネットは、グリーン燕尾服、ニットのキュロットに金の拍車つきの柔らかなブーツ、といういでたち：

[...] Mme Rosanette, qui portait un habit vert, une culotte de tricot et des bottes molles à épron d'or. (p.117)

ワトー風牧童のなりをした小柄な男がその杖で酒神巫女の杖を打ちつけているが、巫女は頭に葡萄の冠、脇腹に豹の毛皮、古代悲劇俳優風の

半長靴に金色リボンを結んでいる：

[...] une Bacchante, couronnée de raisins, une peau de léopard sur le flanc gauche et *des cothurnes à ruban d'or*. (p.117)

その反対側では、真珠色のビロードの短外套を纏ったポーランド女が、白い毛皮の縁取りのついたピンクの深靴に収まったパール・グレーの絹ストッキングの上で、紗のペチコートを揺らしている：

De l'autre côté une Polonaise, en spencer de velours nacarat, balançait son jupon de gaze sur ses bas de soie gris-perle, pris dans *les bottines roses cerclées de fourrure blanche*. (p.117)

最も注目を集めているのは名の知れた踊り子ルルー嬢で、彼女が飛び跳ねるたびにダイヤの留め金つきの舞踏靴が、隣の、鉄の甲冑にすっぽり収まった長身の中世貴族の鼻先にまで届きそうになる：

[...]; et dans les bonds qu'elle faisait, *ses écarpins à boucles de diamants* atteignaient presque au nez de son voisin, un grand Baron moyen âge tout empêtré dans une armure de fer. (p.117)

踊りができず一人取り残されるフレデリックは、この場に居合わせることで、アルヌー夫人に敵対する企てに加担しているような後ろめたさを感じるが、若さの反発心からやがて目の前の魅惑を享楽する気になり、気後れが薄れていく。女性たちはフレデリックの前を、額に浮かぶ汗の玉がはっきり見えるほどに、すれすれに踊り過ぎていく。テンポのあがるターンの連続を見つめるフレデリックは陶然となり、夢想の世界を彷徨

徨いだす。

上半身をまっすぐにして、伏目がちにワルツを踊るスイス女のステップの下から、湖畔の山荘での静かな快樂の世界が開ける：

Des horizons de volupté tranquille, au bord du lac, dans un chalet, se déroulaient *sous les pas de la Suisse*, qui valsait le corse droit et les paupières baissées. (p.121)

軽やかな足指が嵌め木の床に触れるか触れないかのように踊っている荷揚げ人夫の女の手足のしなやかさと表情の生真面目さのなかに、“科学の正確さと小鳥の軽快さ”³¹を合わせ持つ、いま風恋愛のあらゆる洗練さが秘められているような気がする：

Mais la Débardeuse, dont les orteils légers effleuraient à peine le parquet, semblait recéler dans la souplesse de ses membres et le sérieux de son visage tous les raffinements de l’amour moderne, qui a la justesse d’une science et la mobilité d’oiseau. (p.121)

『感情教育』以外の自伝系列作品等における舞踏会の場面のうち、女性の足／履物に関する描写があるものとして『スマール』《Smarh》の劇中劇“小ブルジョワ喜劇”《Petite comédie bourgeoise》がある。ハネムーンの後、社交を好みだし舞踏会に行きたがる新妻に打算的な夫が同意を与える場面である：

Il était fier de faire briller sa femme et de montrer ses diamants; il pouvait se dire, en regardant les hommes lui presser la taille demi-nue, en faisant le plus gracieux sourire qu’il leur

était possible: 《Cette femme est à moi; vous avez le sourire, moi j'ai le baiser; vous avez la main gantée, *le pied chaussé*, le sein voilé, et moi j'ai la main nue, *le pied nu*, le sein découvert. [...]》.³²

半裸ともいえる妻の体を、それ以上はできないほどに愛想よく微笑をうかべつつ、強く抱きしめながら踊る男たちに対し、それを見つめる夫が妻からの悦楽の彼我の享受を心のうちに比較して優越感を掻き立てるのだが、その対比項目として、微笑み——接吻、手袋をはめた手——裸の手、ヴェールに覆われた乳房——むき出しの乳房、に加え靴を履いた足——素足、が挙げられている。

また、『汝何を望まんとも』《Quidquid volueris》には、ブラジルから連れて来られた、黒人の奴隷女とオランウータンの間に出来たとされる、半類人猿ともいうべきジャリオが、密かに恋するアデルと主人のポールの結婚祝賀舞踏会の模様を眺める場面がある：

Djario était debout, appuyé sur un battant de la porte, la valse passait devat lui, tournoyante, bruyante, avec des rires et de la joie; chaque fois il voyait Adèle tournoyer devant lui et puis disparaître, revenir et disparaître encore, [...] il voyait passer devant lui *le bas d'une robe blanche, à fleurs roses, et deux souliers de satin qui s'entrebâillaient*, et cela dura longtemps, vingt minutes environ.³³

入口の扉に寄り掛って眺めるジャリオの目の前を、ワルツの一団が笑いと歓声をあげながら踊り過ぎていくたびに、彼の視線はアデルの、白地にバラの花をあしらったドレスの裾と、その下の、なかば離れて開かれ

た恰好になっている 2 個の繻子の短靴に注がれる, という状態が約 20 分にもわたって続いた, というものである。ジャリオはその後 1 歳にも満たないアデルの子を芝生に叩きつけて殺すという残虐性をあらわし, 次にアデルを犯して殺し, 彼自身も大理石の暖炉に頭から突進して死に果てる:

Quand il l'eut bien longtemps sentie immobile et glacée, il se leva, la retourna sur tous les sens, *embrassa ses pieds, ses mains, sa bouche*, et courut en bondissant sur les murailles.³⁴

その前に, ジャリオは冷たく動かなくなったアデルの体をあらゆる方向にひっくり返して接吻するが, その箇所として最初に記されているのは彼女の足なのである³⁵.

2.2.3. (2)フレデリックの愛人たちの描写——アルヌー夫人以外の 3 人

『感情教育』のなかでフレデリックを愛した 4 人の女性のうち, 実家の隣人で, 銀行家ダンプルーズの地域一帯の財産管理を任されているロック老人が女中との間にもうけた娘ルイーズは, 唯一フレデリックより年下の女性である。彼女の率直で一途な愛に, フレデリックは生まれて初めて女性に愛される実感を得るが, 30 女を好む³⁶ 彼は辟易しこれを軽んじる。第 2 部, 第 5 章で:

[…]; et elle portait malgré son deuil (tant son maugais goût était naïf), *des pantoufles en paille garnies de satin rose, curiosité vulgaire, achetées sans doute dans quelque foire*. Il s'en aperçut, et l'en complimenta ironiquement. (p.251)

フレデリックは、喪中に相応しくない“彼女の世間知らずな趣味の悪さ”を現すものとして、何処かの市でも買ってきたような、ピンクの繻子の飾りのついた麦藁製の珍奇な部屋履きを皮肉るのである。

一方、フレデリックが初めて女性と肉体関係をもった相手であるロザネットの足／履物に関する描写が2カ所ある。その一つは、第2部、第2章でフレデリックが仮装舞踏会での彼女との約束を思い出し、ダンプルーズ家のお客日の帰りに訪ねる場面である：

La porte de l'antichambre était ouverte. Deux bichons havanais accoururent. Une voix cria: —《Delphine! Delphine! — Est-ce vous, Félix?》 Il se tenait sans avancer; les deux petits chiens jappaient toujours. Enfin Rosanette parut, enveloppée dans une sorte de peignoir en mousseline blanche garnie de dentelles, *pieds nus dans des babouches*. (p.132)

他の一つは、第2部、第6章で、アルヌー夫人とのトロンシェ通りのランデヴーが不首尾に終わった翌日、フレデリックはロザネットと肉体関係を結ぶ。これにより彼はロザネットをアルヌーと共有する状態になるが、6月暴動時のフォンテーヌブロー旅行を経て、やがてロザネット宅に入りびたりになる：

Le meilleur de la journée, c'était le matin sur leur terrasse. En caraco de batiste et *pieds nus dans ses pantoufles*, elle allait et venait autour de lui, nettoyait la cage de ses serins, donnait de l'eau à ses poissons rouges. (p.356)

15歳で酒飲みの母によって男に売られ、やがて典型的なロレットとし

て、アルヌーのサン・クルーにあった別荘の隣人で債権者のウッドリー老をはじめ、アルヌー本人、歌手デルマール、ロシア人公爵ツエルノコフそしてフレデリック、と奔放な男性遍歴を繰り広げるロザネットの描写は、着ているものが一方はレース飾りのついた化粧着姿、他方は白麻の部屋着姿といずれもしどけなさをあらわすものであるが、両方とも“部屋履き／スリッパに素足を入れている”という足元の描写は、その肉感性によりこれに放埒感を付け加える効果をもたらしていると言えよう³⁷。

一方、フレデリックが上流社会へ上昇するための踏み台と考え、夫の死後結婚寸前までいく、ダンブルーズ夫人に関する足／履物の描写も2カ所ある。一つは、第2部、第4章で、大学で知り合った子爵シジーとのアルヌー夫人の名前の誤解に起因する決闘の顛末を、資金援助の申込を断わったユソネのフランバール紙上に暴露され、またアルヌーの「工芸美術社」で知り合った画家ペルランに描かせたロザネットの肖像画代金を請求されるなど一時精神的に落ち込んだフレデリックが、遺産の半分以上を割いて購入した北部鉄道株の急騰で自信を取り戻し、ダンブルーズ家恒例の夜会に出かけていった場面である：

Il distingua des habits noirs, puis une table éclairée par un grand abajour, [...] et un peu plus loin, Mme Dambreuse dans un fauteuil à basculer. [...]; et elle se tenait quelque peu renversée en arrière, avec le bout de son pied sur un coussin, — tranquille comme une oeuvre d'art pleine de délicatesse, une fleur de haute culture. (p.236)

他の一つは第3部、第2章で、6月暴動の直後ダンブルーズ家で開かれた晚餐会の食事の後、フレデリックがダンブルーズ夫人と庭で歓談す

る場面：

Elle se tenait, comme d'habitude, un peu en arrière dans son fauteuil, avec tabouret devant elle; *on apercevait la pointe d'un soulier de satin noir.* (p.349)

これら2個の描写とも、椅子のなかで心待ち体を後ろに反らせ、前に置いたクッション或いはスツールの上に足先を見せている、という密やかな頹廢的ムードをそこはかとなく漂わせるポーズのものとなっている。

以上見てきたところからフローベールは足／履物に関して、ロザネット、ダンブルーズ夫人それぞれに、一つのパターン化された状況を設定していることが分かる。このことは『初稿感情教育』のルノー夫人についても一部見られるところであり³⁸ また、“足先が見えるようにしておく”という表現も、同じくルノー夫人の人物描写のなかにもでてきている：

Si sa gorge, qu'elle laissait volontiers voir, était peut-être un peu trop pleine, en revanche elle envoyait une si douce odeur quand on s'approchait d'elle! Elle cachait bien, il est vrai, le bas de sa jambe, *mais elle montrait le bout de son pied, et il était très mignon,*³⁹

2.2.3. (3)アルヌー夫人の描写

アルヌー夫人に関わる足／履物の描写は6カ所ある。1番目は、第1部、第5章で夫人の聖名祝日に、フレデリックがユソネ、ペルラン等とともにアルヌーのサン・クルーの別荘に招待された場面である。上機嫌

のアルヌーに敷地内を案内されるフレデリックの頭上に、音階練習をする夫人の歌声が響くが、隣人のウッドリー夫妻がやってくるとぴたりと止む：

Puis elle parut elle-même au haut du perron; et, comme elle descendait les marches, *il aperçut son pied. Elle avait de petites chaussures découvertes en peau mordorée, avec trois pattes traversales, ce qui dessinait sur ses bas un grillage d'or.* (p.80)

ここでは、アルヌー夫人の足に向けられたフレデリックの視線が “il aperçut” と明示されている。ところで、『感情教育』の中で、動詞 *apercevoir* の具現的な用例⁴⁰のうち、アルヌー夫人関連の描写場面で、主語：フレデリック、時制：単純過去形の組合せのケースは上記を含め3カ所ある。2番目のケースは、第2部、第6章で、フレデリックがルイーゼの依頼を受け、今や陶器商に衣替えしているアルヌーの店から送らせた黒人人形が、注文の品と違っていたため店を訪れる場面に見られる。経営が思わしくなく、店員の姿も見えない店内をフレデリックが進み、カウンターの前で聞こえよがしの足音を立てると、奥のカーテンが上がって、通常、店に下りて来ることのないアルヌー夫人が現れる：

—《Comment, vous ici!》—《Oui》, balbutia-t-elle, un peu troublée. 《Je cherchais……》 *Il aperçut son mouchoir près du pupitre, et devina qu' elle était descendue chez son mari pour se rendre compte, éclaircir sans doute une inquiétude.* (p.268)

3番目のケースは、同じ章で、前述したアルヌー夫人との不首尾に終わったランデヴーで、フレデリックが約束の時間を過ぎても現れない夫人を、

トロンシェ通りの路上で焦燥のうちに待ち続ける場面である：

Elle allait paraître. Elle était là, derrière son dos. Il se retournait: rien! Une fois, *il aperçut, à trente pas environ, une femme de même taille, avec la même robe.* Il la joignit; ce n'était pas elle! (p.280)

これら 3 個の “il aperçut” の中身を比較すると、最初のアルヌー夫人の足／履物の描写の丁寧さは明らかである。2 番目の、書見台のそばの夫人のハンカチについては、フレデリックが、かつてアルヌー家恒例の木曜日の晚餐会に招待されていたとき、その香りをひそかに味わい⁴¹、また、夫の不実に泣きいくどこか口許にハンカチを強く押し当てる夫人を目の当たりにして、彼女の涙でぐっしょり濡れたその白麻への化身願望を抱いたものであるが⁴²、ここでは単に “彼女の” と形容されているだけである。また、3 番目のケースでは、人違いの女性について “同じ体つきで同じ服の” と極めて簡略な描写になっていて、フローベールが、一般に、女性描写の際に添えている、髪と目の色および形、服装の種類、色、素材、襟や袖の特徴、着こなし、当人の体型、雰囲気、様態などの形容がない。これは、前者ではアルヌー夫人の不意の出現による驚き、後者では約 30 歩という距離もさることながら、夫人が現れないことに対する苛立ちと焦り、からフレデリックに心理的余裕がなくなっていることを示す効果を狙ったものであろう。サン・クルーの別荘でのフレデリックはこれらとは逆の状況下にあるわけだが、とはいえ、1 番目の描写はアルヌー夫人が正面玄関の僅か数段の階段 (perron) を下りるという極めて短時間の動作のうちに、夫人の足が収まっている履物の種類、色、材質のみならず、その靴紐の形状、素材、靴下とのコントラストに至るまでの細部を素早く且つ精確に見て取ったものとなっており、これは取り

も直さずフレデリックがアルヌー夫人の足／履物にいかに強い関心を抱いているか、を示すものであるといえよう。

一方、『感情教育』以外の自伝系列作品等における眼前の描写としては、『初稿感情教育』の中でルノー夫人が朝アンリの部屋にやってくる次の場面がある：

Elle venait. Quelquefois c'était le matin, encore en bonnet de nuit, dans sa robe flottante et sans corsage, avec la fraîche odeur du linge fin, le visage clair, lavé d'eau froide, les mains roses et *les pieds dans de petites pantoufles de peau brune recouverte de fourrure*. Cette femme-là, vraiment, était d'un ragoût étrange, sa peau exhalait d'elle-même un parfum doux, vapeur de beauté qui monte à la tête comme le bouquet de vins fameux; *son pied avait cent mignardises que trahissait sa chaussure*, et l'on présentait sous son vêtement des délicatesses sans nombre.⁴³

彼女の足が収まっている部屋履きについては材質、色、形状が記述されていて、他のナイトキャップ、着物、顔、手などに比べ、より具体的な描写になっている。さらにその視線は、彼女の足が無数の魅惑に満ちていることを部屋履き越しに感じ取るほどに、これを熟視しているのである。

また『この香を嗅げ』には、3人の子持ちの女曲芸師マルグリットと若いイザベラーダに関する記述のなかに次のような足の言及がみられる：

Ah! C'est qu'Isabella était jeune, jolie, elle avait vingt ans, ses dents étaient blanches, ses yeux beaux, ses cheveux noirs, sa

taille fine, *son pied mignon*, et Marguerite était laide, elle avait quarante ans, les yeux gris, les cheveux rouges, la taille grosse, *le pied large*;⁴⁴

2人の女性を比較する尺度として、美醜、年齢、齒、目、ウエスト、と共に、足の形状が用いられている。

アルヌー夫人に関する眼前の描写の2番目は、同じ章でサン・クルーからパリへ戻る馬車の中の場面である。フレデリックに託されたヴァトナ嬢からの手紙を読んで、急にパリへ帰ると言い出したアルヌーは、夫人に差し出すバラの花束の包みにポケットから手当たり次第に取り出したこの手紙を使い、それを読んだ夫人は帰りの馬車の中で涙を流す：

—《Vous souffrez?》—《Oui, un peu》 reprit-elle. La voiture roulait, et les chèvrefeuilles et les seringais débordaient les clotûres des jardins, envoyaient dans la nuit des bouffées d'odeurs amollissantes. *Les plis nombreux de sa robe couvraient ses pieds.* Il lui semblait communiquer avec toute sa personne par ce corps d'enfant étendu entre eux. (p.85)

夜の闇を走る馬車のなか、沿道の垣根をはみ出すスイカズラやバイカウツギから漂ってくる蕩けるような香りを嗅ぎつつ、フレデリックの視線は、別荘の正面玄関の階段で見たアルヌー夫人の足を求めて、それを覆っている多数の襞のついた彼女の裳裾に注がれるのである。しかしここには単なる回想のほかに、もう一つの要素が介在すると見る事が可能であろう。それは、この2つの場面の間に、夜の幄を前にサロンで2人が初めて“意味のある会話”⁴⁵を交わす場面があり、そこで夫人の、水底にまで達する陽光のごとき眼差し、が心の奥まで浸透するのを感じるフレ

デリックが、自分を犠牲にし即座に夫人に一身を捧げたいという忘我の息吹⁴⁶が内面から沸き上がるのを感じていることである。つまり、フレデリックを『狂人の手記』の“ぼく”の延長線上にとらえ、“空想の描写”の項でみた“自己犠牲と足”の関わりをここにあてはめて考えるならば、2人の間に眠る子供を介してアルヌー夫人の全身と繋がりをを感じるフレデリックの心の中で、彼女の足が特に意識されているとは言えないであろうか？

眼前の描写の3番目は、第2部、第3章で、アルヌー夫人が手形の決裁猶予を名宛人のダンブルーズに取りなしてくれるよう、フレデリックに依頼にやって来た場面のものである。フレデリックがこの要請を受け、帰ろうとする夫人を引き留めると、夫人は立ったまま部屋の装飾品等を見回す：

[…]; elle souleva la cuvette de bronze qui contenait les plumes; ses talons se posèrent à des places différentes sur le tapis. Elle était venue plusieurs fois chez Frédéric, mais toujours avec Arnoux. Ils se trouvaient seuls, maintenant, — seuls dans sa maison —; c'était un événement extraordinaire, presque une bonne fortune. (p.188)

自分の家でアルヌー夫人と2人きりという僥倖ともいえる状況のなかで、机上の筆記用具など手に取ってまわる夫人を追うフレデリックの視線は、夫人の踵と絨毯の接触面に注がれる。この場面もフレデリックの献身の場面である。彼は親友デロリエの新聞発行の夢の実現に約束した資金を、関係した陶土会社が倒産し借金の返済を迫られているというアルヌーに“妻も期待いたしおり……”の一句のために貸してしまうが、その後アルヌーは言を左右にこれを返済しない。このためアルヌーは疎

か夫人をも恨みに思うフレデリックへの再度の救済依頼なのである。フレデリックは、心中、アルヌー夫人の踵によって跡をつけられる絨毯に我身を置き換えてはいないであろうか？ さて、この絨毯と足の接触面を捉えた記述であるが、これは『この香を嗅げ』に早くも姿を現している：

Oui, à côté de cette jeune fille si belle, si fraîche, se trouvait là, comme contrepoids, une femme rouge, aux joues épaisses, aux pieds mal faits, à la tenue déhanchée; elle s'avavançait aussi au son de la même musique, et *ses pieds touchaient le même tapis que ceux d'Isabellada*.⁴⁷

一方、踵に向けられる視線の描写は『十一月』にもある。“ぼく”を悩ませた快樂と恋愛についての考えが、再び“ぼく”にとりついた18歳の夏のある日、初めて娼婦の部屋を訪れて行く途中の、通りすがりの女性の描写である：

Et puis, la femme était partout, je la coudoyais, je l'effleurais, je la respirais, l'air était plein de son odeur; je voyais son cou en sueur entre le châle qui les entourait, et les plumes du chapeau ondulant à leur pas; *son talon relevait sa robe en marchant devant moi*.⁴⁸

前に行く女性に対する“ぼく”の視線は、ショールの間から見える汗ばんだ首筋と歩みにつれて波うつ帽子の羽根飾りから転じて、歩きながらドレスの裾を捲くり上げている踵に注がれる。また、同じ『十一月』には女性とは限定されていないものの、街頭で通行人の足元を凝視すると

いう次のような記述がある：

J'aimais à me perdre dans le troupillon des rues; souvent je prenais des distractions stupides, comme de regarder fixement chaque passant pour découvrir sur sa figure un vice ou une passion saillante. [...] *Ou bien je ne regardais seulement que les pieds qui allaient dans tous les sens, et je tâchais de rattacher chaque pied à un corps, un corps à une idée, tous ces mouvements à des buts, et je me demandais où tous ces pas allaient, et pourquoi marchaient tous ces gens.*⁴⁹

他方、絨毯と履物の接触面を聴覚でとらえている描写が、ダンブルーズ家の夜会の室内描写のなかにある：

Des jardinières, sous les tableaux, occupaient, jusqu'à hauteur d'homme, les intervalles de la muraille; et une théière d'argent avec un samovar se mirait au fond, dans une glace. Un murmure de voix discrètes s'élevait. *On entendait des escarpins craquer sur le tapis.* (p.236)

同様に、『初稿感情教育』にもルノー夫人の人物描写のなかに次の一文がある：

Quand elle s'habillait et qu'elle mettait son grand chapeau de paille d'Italie à plume blanche, c'était une beauté royale, pleine de fraîcheur et d'éclat; *dans sa marche rapide sa bottine craquait avec mille séductions, [...]*⁵⁰

眼前の描写の4番目は、第2部、第6章で、アルヌー夫人とのランデヴーのために、フレデリック自ら夫人用の部屋履きを購入する場面のものである。トロンシェ通りの道すがら夫人を誘い入れる目的でアパルトマンをわざわざ借り上げたフレデリックは、調度品を新調しようと、3軒の店をまわる：

Puis il alla dans trois magasins acheter la parfumerie la plus rare; il se procura un morceau de fausse guipure pour remplacer l'affreux couvrepieds de coton rouge, *il choisit une paire de pantoufles en satin bleu*; la crainte seule de paraître grossier le modéra dans ses emplettes; (p.276)

このランデヴーは前夜夫人の息子ウジェーヌを突然襲った咳の発作のために実現せず、それと知らずに自尊心を傷つけられた気持ちになったフレデリックは、翌日の夜レストランでの食事の帰り、“憎悪の生んだ鋭い機知と、心のなかであくまでアルヌー夫人を辱めたい気持ちから”⁵¹ ロザネットを借り上げたアパルトマンに連れ込む：

Les fleurs n'étaient pas flétries. La guipure s'étaient sur le lit. *Il tira de l'armoire les petites pantoufles*. Rosanette trouva ces prévenances fort délicates. (p.284)

ここで、フレデリックがアルヌー夫人の“可愛い小さな足”を入れるべく用意した“青い緞子の部屋履き”は、瀆聖の儀式のための小道具の一つとして、ロレットのロザネットに差し出されるのである。

眼前の描写の5番目は、“回想の描写”の項でみた競売の場面に出てくる：

Ensuite, on vendit ses robes, puis un de ses chapeaux [...], puis ses fourrures, puis ses trois paires de bottines — et le partage de ses reliques, où il retrouvait confusément les formes de ses membres, lui semblait une atrocité, comme s'il avait vu des corbeaux déchiquetant son cadavre. (p.414)

この場面でアルヌー夫人の深靴は、次々に競売にかけられる夫人の身の回り品の一つとして、個数が示されているだけで特別の形容は添えられていない。しかし“彼女の手足の形までおぼろげながら偲ばれるこうした貴重な思い出の品々”⁵² がばらばらに処分されていく光景は、フレデリックの心に夫人が遺体となり鳥に啄まれているさまを連想させ、彼の目に“残虐行為”と映るのである。

眼前の描写の最後は、序で触れた第3部、第6章のアルヌー夫人とフレデリックの最後の別れの場面のものである。この時45歳になっているフレデリックは、アルヌーの借金返済のためブルターニュの片田舎から出てきた夫人に16年振りに再会する。夫人は自ら望んだ夜の街の散歩からフレデリックの部屋にもどり、初めて帽子をとる。ランプに照らし出される白髪にフレデリックは胸をつかれ、この幻滅を隠すべく夫人の膝元に座り、かつて自分が夫人に抱いていた思慕の情を回想しつつ優しく囁きはじめる：

Frédéric, se grisant par ses paroles, arrivait à croire ce qu'il disait. Mme Arnoux, le dos tourné à la lumière, se penchait vers lui. Il sentait sur son front la caresse de son haleine, à travers ses vêtements le contact indécis de tout son corps. Leurs mains se serrèrent; *la pointe de sa bottine s'avavançait un peu sous sa robe, et il lui dit, presque défaillant: —《La vue de votre pied me*

trouble.》Un mouvement de pudeur la fit se lever. (p.423)

フレデリックには、我にもあらず言葉が口をついて出て、やがて自らその言葉に酔い、最後にはそれを信じるようになるという性向があり、それは上の引用箇所以外の場面でも見られるものであるが⁵³、ここでは文脈上《La vue de votre pied me trouble.》の箇所は“se grisant par ses paroles, arrivait à croire *ce qu’il disait.*”の意味的支配をうけるものでは勿論なく、独立した文である。その台詞の中で、“心の中に一つの情動、自己制御を危うくするような、異常あるいは苦痛な精神作用を惹起する”⁵⁴ことを表す動詞“troubler”が使われている意味には深いものがあるだろう。蒸気船上での空想に始まり、夫人のドレスの裾飾りの下で動いていたイメージが脳裏に残り、陳列ケースの靴をみて想像し、恋歌の歌詞から他の女性の裳裾に目を釘付けにされ、別荘の正面階段を下りてくるさまを素早く看取し、夜の闇を走る馬車のなかで視線がドレスの襞に引きつけられ、自室の絨毯にその踵が残していく跡を凝視し、或いは、裏切られた期待に冒瀆で報いるべき手段とし、競売の憂き目に会う絨毯と深靴をみて軽やかな足の運びを思い起こし、胸を抉られた、アルヌー夫人の足、18歳から29歳にわたる多感な青年時代のフレデリックに、恋愛という感情の教育を施した女性達のなかでひとときわ高く聳えるアルヌー夫人の足が、16年の歳月を経たいま再び眼前に現れたのである。“troubler”がここで含意するところのものは、これら一連の内密な体験の糸を手繰り寄せてこそ十全に把握されうるものであろう。既に10代半ばにして、ルーアン郊外の老女の“可愛らしい小さな足”を鮮明に記憶に留め、トルーヴィルではマリアの幻にむかって“全てをあなたの足元に差し出し、その上をあなたに踏み歩いて欲しい”と叫んだ『狂人の手記』のなかの“ぼく”がプロトタイプとしてここでフレデリックにオーバーラップする⁵⁵。しかしここでフレデリックは、アルヌー夫人が身を任

せるつもりで来たのかとかってないほど激しい情欲を感じる一方で、名状し難い一種の嫌悪感、近親相姦に対する恐怖のような感情におそわれ、万が一の後味の悪さへの危惧と同時に精神の内奥に抱きつづけた理想像を傷つけまいとする気持ちから、抱きしめた夫人から我身を離し、かくして彼の人生の基盤そのものでさえあったアルヌー夫人に対する夢想の回路を己が心のうちに閉じるのである。

以上、自伝系列作品等における足／履物に関わる記述の内容を、空想、回想、眼前の3種類に分類して検討してきたが、これらの作品はチボーデが“おそらくフローベールの作品のうちで、創作でない、自伝と言いうる唯一のもの”、と規定している⁵⁶『狂人の手記』、と『思い出・覚書・瞑想』を除き、いわゆる“構想”されたものであり、そこでの記述は熟成度の差こそあれ、いずれもそれなりに“作品を構成するための思考”という濾過器を通過させたものである。では、それとは対照的な“書簡”のなかでは足／履物に関しどのような記述が見られるであろうか。

3. “書簡”に見られる女性の足／履物への言及

フローベールの書簡において、女性の足／履物への言及が見られるのは愛人の女流詩人ルイーズ・コレ宛てと、エリザ・シュレザンジェ宛てのものである。ルイーズ・コレ宛てでは1846年8月4日付けのものから1855年3月6日付けのものまで、276通の手紙が残っているが、このうち最初の手紙を含め1846年の5通と1853年の1通に、彼女から貰った部屋履きに関する記述があり、他に1853年の夏、約1カ月母親と共に過ごしたトルーヴィルの浜辺での女性海水浴客の足を観察した模様を述べている手紙が1通ある。一方、エリザ・シュレザンジェ宛てでは1856年10月2日付けのものから1872年10月5日付けのものまで8通の手紙が残っているが、このうち、1871年9月6日付けの手紙でトルーヴィル

の浜辺が彼女の足跡と共に回顧されている⁵⁷。まず、ルイーズ・コレ宛てのものであるが、次の引用箇所は肉体関係を結んだ1週間後の再会の後に書かれた、彼女宛の最初の手紙の冒頭部分である：

Il y a douze heures nous étions ensemble; hier à cette heure-ci, je te tenais dans mes bras...t'en souviens-tu? ...Comme c'est déjà loin! La nuit maintenant est chaude et douce; j'entend le grand tulipier, qui est sous ma fenêtre, frémir au vent et, quand je lève la tête, je vois la lune se mirer dans la rivière. *Tes petites pantoufles sont là pendant que je t'écris; je les ai sous les yeux, et je les regarde.* Je viens de ranger, tout seul et bien enfermé, tout ce que tu m'as donné; tes deux lettres sont dans le sachet brodé; je vais les relire quand j'aurai cacheté la mienne. (Mardi soir, minuit 4 août 1846)⁵⁸

12時間まえの抱擁の回想で筆を起し、自分の周りの夜の風景を描写した後ですぐ“貴女の可愛い部屋履き”に触れている。彼はそれを側に置きながらこの手紙を書いているのだが“目の下にあり、そして見つめて”いると語る口調からフローベールの心の弾みが伝わってくる。そしてこの手紙の後の部分に次の文がある：

Il me semble que j'écris mal; tu vas lire ça froidement; je ne dis rien de ce que je veux dire. C'est que mes phrases se heurtent comme des soupirs; pour les comprendre, il faut combler ce qui sépare l'une de l'autre; tu le feras, n'est-ce pas? Rêveras-tu à chaque lettre, à chaque signe de l'écriture, *comme moi regardant tes petites pantoufles brunes?* Je songe aux mouvements de ton

pied quand il les emplissait et qu'elles en étaient chaudes. Le mouchoir est dedans. Je vois ton sang, je voudrais qu'il en fût tout rouge.

この手紙を上手く書けないので、理解してもらうためにコレに文と文の間隙をうめて貰わなければならないとして、“それぞれの文字、書き方の特徴ひとつにも空想をふくらませてくれますね”⁵⁹と頼んでおり、その空想の例証として、彼女の部屋履きを見つめながら、彼女の足がその中にすっぽり収まり部屋履きが暖かくなると、その中でどんな蠢きかたをしたのだろうか、と自分が現に浸っている隠微な夢想を持ち出しているのである。この2日後の手紙の後書きにもこの部屋履きへの言及がみられる：

*C'est l'heure où, seul et pendant que tout dort, je tire le tiroir où sont mes trésors. Je contemple tes pantoufles, ton mouchoir, tes cheveux, ton portrait, je relis tes lettres, j'en respire l'odeur musquée. Si tu savais ce que je sens maintenant!…… dans la nuit mon coeur dilate et une rosée d'amour le pénètre! Mille baisers, mille, partout, partout. (Jeudi soir 11 heures, 6 août 1846)*⁶⁰

皆が寝静まっている間に、ひとり引き出しから取り出して見入る宝物、としてコレから貰ったハンカチ、髪の毛、肖像の前にまず部屋履きが挙げられている。彼女に対し、分かって貰えたら！ とフローベールが熱望する“ぼくが今何を感じているか”はコレの手紙の麝香の匂いのことだけであろうか？

さらにこの2日後の手紙には、部屋履きにたいする“異常な愛着”のほどをはっきりと示す赤裸々な告白がある：

La bonne idée que j'ai eue de prendre tes pantoufles! Si tu savais comme je les regarde! [...]. Oh! que ta tête était belle, toute pâle et frémissante sous mes baisers! Mais comme j'étais froid! Je n'étais occupé qu' à te regarder; j'étais surpris, charmé. C'est maintenant, si je t'avais... Allons, je vais revoir tes pantoufles. Ah! elles ne me quitteront jamais celles-là! Je crois que je les aime autant que toi. Celui qui les a faites ne se doutait pas du frémissement de mes mains en les touchant. Je les respire; elles sentent la verveine et une odeur de toi qui me gonfle l'âme.
(Nuit de samedi au dimanche, minuit 8 août 1846)⁶¹

ここには、コレから部屋履きを貰うことを思いついたことに対する自己満足の率直な表明の後に、その部屋履きを今再び見てみようとする気持ち、それに触れるときの自分の手の震え、それが発散させる熊葛の香りとコレ自身の匂い、と視覚、触覚さらには嗅覚をも動員させての、部屋履きに対する強烈な愛着ぶりが明白に示されている。ここで注目すべきはこれら両者の間に介在している文である。初めての夜の2人の様態をまた思い起こし、自分は驚き魅了され、コレを見つめるばかりで冷たかったと反省し“今こそ、もし貴女がここにいたら……”と自らを熱く昂らせた後での“さあこれから又部屋履きを見てみよう”なのである。このときフローベールにとり部屋履きはコレの全き象徴的代替物となっているだろう。そして、上記引用箇所在先立つ部分で、若し目の前に彼女がいれば抱き締め接吻するだけでなく噛みつきたいほどに野獣のような肉欲、肉食獣のような激しい愛の本能を感じている、と書くフローベールにおいて、“これは決して放さない。貴女と同じ程に好きだ”と告白する彼女の部屋履きが、性的快感に直結する代償的行為へと向かう激しい衝動を惹起しているであろうことは容易に推測され得るところである⁶²。

また、その2週間後の手紙の冒頭に彼は次のように書いている：

Quand le soir est venu, que je suis seul, bien sûr de n'être pas dérangé, et qu'autour de moi tout le monde dort, *j'ouvre le tiroir de l'étagère dont je t'ai parlé et j'en tire mes reliques que je m'étale sur ma table; les petites pantoufles d'abord, le mouchoir, tes cheveux, le sachet où sont tes lettres; je les relis, je les retouche.* (Dimanche, 23 août 1846)⁶³

8月6日の手紙の内容と同じ行為が繰り返されているが、ここでは引き出しから取り出した“ぼくの記念品”をテーブルの上に並べる順番が、“まず最初に可愛い部屋履き”と明示されている。1846中に書かれた手紙で部屋履きに言及している最後の手紙は、この1カ月後のもので、その末尾に次のようにある：

Adieu chère aimée, mille baisers sur tes beaux yeux et sur ces longues papillotes *dont je vais quelquefois respirer un peu l'odeur dans la petite pantoufle à crevés bleus; car c'est là que j'ai serré la mèche.* La mitaine est dans l'autre, la médaille à côté, et à côté les lettres. (Dimanche soir, 10 heures, 20 septembre 1846)⁶⁴

ここでの主役は部屋履きではなく彼女の毛巻き紙である。部屋履きは毛巻き紙の香をかすかながら偲ぶよすがとなる彼女の髪を入れてある容器として言及されている。

その後2人の関係は冷却し、フローベールからの手紙は、1848年8月18日(或いは25日)付けのものを最後に彼の東方旅行を挿み3年間の中絶がある。部屋履きが最後に言及されているのは1853年の手紙において

である：

Sais-tu ce que je viens de faire, depuis deux heures de l'après-midi sans désespérer? De classer, de ranger *toute* ma correspondance depuis quinze ans. J'en avais plein trois énormes boîtes et quatre cartons! [...]. Les tiennes, cher amour, emplissent tout un carton. Elles sont à part avec les petits objets qui viennent de toi. J'ai revu *la branche verte qui était sur ton chapeau à notre premier voyage à Mantes, les pantoufles du premier soir et un mouchoir à moi, plein de ton sang*. J'ai bien envie de t'embrasser ce soir. (Mercredi, 11 heures du soir, 28 décembre 1853)⁶⁵

17歳このかたの全ての手紙を整理した際、コレからの手紙用のボール箱に入った彼女から貰った細々した品物類のなかに、初めての夜の記念の部屋履きを見つけて無性に彼女を抱きたくなったという告白である。

フローベールが部屋履きを眺めるときの状況として、1846年の5通の手紙のうちの3通に“一人きりで”“皆が寝静まったとき”という表現が繰り返されている。このことは、彼がこの“部屋履き崇拜”をいかに秘密にしておきたかったかを示すものであろう。これらのコレ宛て書簡における部屋履きへの言及を時系列的に眺めてみると、1)最初の3通に連続して現れ、その3通目の手紙に最も激烈な表現が見られる、2)その後の2週間に6通の手紙が書かれているが、そこでは言及がみられない、3)2週間後の手紙の言及でトーンが落ちている、4)その後の1カ月の間に17通の手紙が書かれているが、そこでは言及がみられない、5)1カ月後の手紙では脇役的に触れられている。6)最後に、7年間のブランクの後に懐古的に触れられている、という経過を辿っている。

恋情に夢中になった状態のとき心の奥に秘められた性向がその姿を現し、2人の関係が緊張をはらむにつれて後退し、平穏時にまた姿を垣間見せるという構図が見てとれる。

さらにこれに関連して、モーパッサンの次のような注目すべき文章がある。これは、フローベールが死の1年前に行った大型トランク一杯分の古い手紙類の整理に、乞われて彼が立ち会った時の様子を伝えるものである。古い手紙を読み返しては暖炉で焼却するという作業を夜を徹しておこなったフローベールは、明け方の4時すぎ手紙の間からリボンで結ばれた小さな包みを見つけだす：

[…]; et l'ayant développé lentement, il découvrit *un petit soulier de bal en soie, et dedans une rose fanée roulée dans un mouchoir de femme*, tout jaune en son cadre de soie. Cela avait l'air d'un souvenir d'un soir, d'un même soir. *Et il baisa ces trois reliques avec gémissements de peine. Puis il les brûla et s'essuya les yeux.*⁶⁶

ここに挙げられている、絹の舞踏靴、ハンカチ、バラのセットは1853年の手紙に述べられているコレの、部屋履き、ハンカチ、小枝のセットとは別物ではなかろうか⁶⁷。これまで引用してきたコレ宛ての手紙のなかで、バラが言及されていないこともさることながら、フローベールから厳しい文章指導を受けて、“物が何であれ、それを表すためには1個の単語、動かすためには1個の動詞、形容するためには1個の形容詞しか存在しない”という観察理論⁶⁸を唱えたモーパッサンが、“pantoufles”を“soulier de soie”と記述するとは考え難いからである。しかし、誰からのものであれ、ここにはフローベールが死の1年前まで持っていた女性の履物があり、彼はそれを見つけて苦痛の呻きをあげつつ接吻し、焼却

して目頭を拭った、という厳然たる事実が残っているのである。

トルーヴィルでの女性海水浴客達の足についての記述は1853年8月14日付けのコレ宛ての手紙にみられるものである：

Donc hier, de la place où j'étais, debout, lorgnon sur le nez, et par un grand soleil, j'ai longuement considéré les baigneuses. Il faut que le genre humain soit devenu complètement imbécile pour perdre jusqu'à ce point toute notion d'élégance. Rien n'est plus pitoyable que ces sacs où les femmes se fourrent le corps, que ces serre-tête en toile cirée! Quelles mines! quelles démarches! *Et les pieds! rouges, maigres, avec des oignons, des durillons, déformés par la bottine, longs comme des navettes ou larges comme des battoirs.*⁶⁹

女性の水着、水泳帽、顔つき、歩き振りなどに優雅さが無くなってしまっていることを嘆いたあとに、足に関して辛辣な描写がみられるが、これはフローベールがこの手紙の冒頭部分で述べている、トルーヴィルの至るところから浮かび上がる思い出が、坂を転げ落ちる小石のように自分の内奥にある苦渋の深淵に沈み込み、10年前と較べ自分は何と年を取ったことか感慨におそわれている、という文脈のなかで捉えられるべきものであろう。ここでの問題は、描写の内容そのものよりもむしろ太陽の照りつけるさなか、鼻眼鏡をかけ長時間にわたり女性の足を観察し続けたという点にあるだろう。

一方、エリザ・シュレザンジェ宛ての手紙は、普仏戦争直後、ドイツからフランスを訪れた彼女がトルーヴィルで会いたいといってきたのに対し、クロワッセに来てほしいと頼んだ返事である：

Comme j'ai passé à Paris tout le mois d'août, je suis maintenant contraint de rester ici. Voilà pourquoi, chère et vieille amie, éternelle tendresse, je ne vais pas vous rejoindre sur *cette plage de Trouville où je vous ai connue et qui, pour moi, porte toujours l'empreinte de vos pas*. [...]. Venez donc, nous avons tant de choses à nous dire, de ces choses qui ne se disent pas, ou qui se disent trop mal, avec la plume.⁷⁰

15歳のときトルーヴィルで“無意識的に”見つめていた、砂浜に印された彼女の足跡が、実はいかに強烈な印象をフローベールに与えていたか、言い換えるなら彼の側に女性の足にたいするいかに本然的な関心が内在していたか、を50歳のときに書かれたこの手紙が如実に示していると言えよう。

4. 結 び

以上において見てきた、自伝系列作品等における女性の足／履物に関する描写の内容を要約すると、次のようになるだろう。

1) 空想の描写

- (1) 女性の様態を空想するとき、その体の部分として足がイメージされている。
- (2) 履物を見て足を空想している。一つでは、“l'étalage d'un cordonnier me tenait en extase” という直截な告白のあと、足の形、色、様態から爪の形状に至るまで空想が広がっている。
- (3) 状況の類似性から足／履物の記憶が瞬時に蘇り、空想へと繋がっている。

- (4) 足／履物の絨毯との接触面を据え、空想を巡らせている。
- (5) 小径の空想のなかに、そこを歩む足がイメージされている。
- (6) 履物（とドレス）のことを2時間にわたり夢想したという告白がある。
- (7) 女性について丸1日夢想した項目に、体の部分として唯一足が含まれている。
- (8) 理想の女性への呼びかけのなかに、その足跡へ接吻し、体の上を踏み歩いて貰いその足を掻き抱きたい、また、全てをその女性の足元に差し出し、その上を歩いて欲しい、という赤裸々な告白がある。

2) 回想の描写

- (1) 足／履物の回想の内容は、いずれも種類、形状、色、材質、様態など詳細かつ鮮明である。
- (2) 女性の回想の中で、体の部分として唯一足／履物が挙げられているものがある。
- (3) 絨毯を見てその上を歩いた足／履物の様態が想起されている。
- (4) 女性の回想において、視線はその足／履物の動きを注視している。
- (5) 閨房の描写において、乳房、脚とともに“可愛い足”が想起されている。

3) 眼前の描写

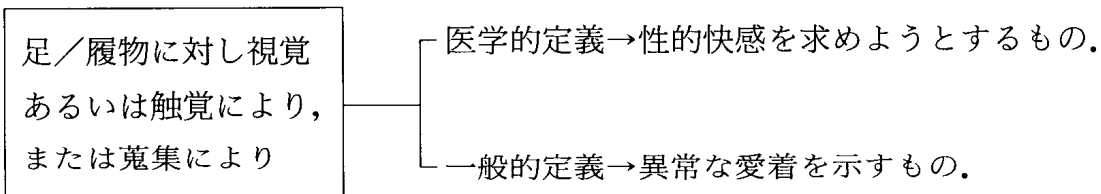
- (1) 仮装舞踏会の状況描写で女性13名中、6名に足／履物の描写が含まれている。
- (2) 踊る女性を見つめる視点が、その足／履物の動きに据えられている。
- (3) 女性から享受する快樂の対比項目の一つに“靴をはいた足／素足”がある。

- (4) 女性の死体に最初に接吻する箇所として足が挙げられている描写がある。
- (5) 女性の様態，性格，の特徴を示すものとして，足／履物の描写が使われている。
- (6) 一般に足／履物の描写は丁寧であるが，動詞“apercevoir”が単純過去形で使われているケースではそれが際立っている。
- (7) 足の魅力を部屋履き越しに感じとるほどに凝視している場面がある。
- (8) 2人の女性の優劣を比較する尺度の一つとして，足の形状が使われている。
- (9) 足／履物と絨毯の接触面を視覚あるいは聴覚で据えている。
- (10) 足／履物を覆うドレスの襞に視線が注がれている。
- (11) 通行人の足を注視し，足を体さらには考えに結び付けてみるという記述がある。
- (12) ランデブーの相手女性のために部屋履きを購入し，不首尾に終わるや，これを瀆聖の儀式の道具として使っている。
- (13) 競売にかけられる履物（絨毯）をみて，胸を抉られる思いがする。
- (14) 16年振りの再会の場面で，“あなたのその足をみるとたまらなくなるんです”と告白する。

これから分かるように，自伝系列作品等における足／履物に関する描写の内訳は，その大部分が，眼前の或いは回想ないしは空想のなかでの視覚に関わるもので，他に触覚に関わるものとして，1)の(8)の体の上を歩いて欲しいという呼びかけ，及び3)の(4)の足への接吻の描写の2つがあるが，履物の蒐集に関わるものは，強いて挙げるとして3)の(12)の履物の購入だけということになろう。

では，この要約を，冒頭にみたフェティシズムの定義と照合させると

どういう結論が導き出されるであろうか。まず、定義そのものを次のように整理してみる：



初めに“医学的定義”と照合すると、要約のうち“性的快感”への繋がりを窺わせるものは1)の(2)の extase の告白、触覚に関わる2項目、2)の(5)の閨房の描写、3)の(3)の享楽の対象、および(14)の最後のセリフの6項目である。従って、これらの記述のある『十一月』、『狂人の手記』、『汝何を望まんとも』、『この香を嗅げ』、『スマール』および『感情教育』の中に女性の足／履物に対するフェティシズムの表現が各々1個ずつ認められる、ということが出来るであろう。

では、“一般的定義”と照合するとどうなるであろうか。この場合はどこに“異常”の境界を設定するかが問題であるが、異常＝普通とは違うこと⁷¹と捉えるなら、上記の5項目は勿論のこと、“要約”の残り21項目の全てが、おのおの、その空想の広がり具合、回想の内容の鮮明さ、眼前への注視の度合いにおいて、足／履物に対する“異常な愛着”を示すものだと言えるであろう。従って、この場合は、本稿で引用した全ての“自伝系列作品等”に足／履物に対するフェティシズムが認められる、ということになるだろう。

一方、書簡に関しては、1846年8月8日付けのルイーズ・コレ宛て手紙が、彼女から貰った部屋履きに対する、“医学的定義にまさに当てはまるフェティシズム”の存在を明確に物語っていることは上に見たとおりである。また、引用した他の手紙類も部屋履きに与えられた“宝物”という呼称、及びその隠匿ぶり、また海水浴客の足にたいする長時間の観察等はフェティシズムの“一般的定義”に当てはまって余りあるものと

言えよう。さらにエリザ・シュレザンジェ宛ての手紙にみられる彼女の足の思い出の強烈さ、モーパッサンが伝える舞踏靴への愛着、はいわば時空を超越したともいうべき性質のもので“異常”と言うほかはない。以上を要約すれば、フローベール自身が女性の足／履物のフェティシストであり、そのフェティシズムは彼が標榜した没我主義に対する翳をなしつつ、14歳の『この香を嗅げ』から47歳の『感情教育』までの自伝系列作品群の根底に、地下水脈の如く密やかに且つ連綿と息づいているといえるのではないか（付録“作品別要約”参照）。

最後に、この足／履物フェティシズムがフローベールの作品のありようにどう結びついているかを、『感情教育』を対象に考察してみよう。この小説は、自己の能力以上の自分を夢見る若者が、芸術、政治、そしてとりわけ恋愛において、夢に引き裂かれる人生をおくるさまを描いた作品である。繊細で無力的な、“醒めて夢みる人” (*rêveur éveillé*)⁷² フレデリックが追い求める3つの愛、ロザネットを対象にした“肉のための愛”，ダンブルーズ夫人を対象にした“社会的野心のための愛”，そしてアルヌー夫人を対象にした“愛のための愛”において、前2者は破綻を来たし、後者は結実しないままに終わるが、その寿命は、彼が当の女性にいただく夢の強さに準じるかたちになっている。そして、実体的に、彼女たちの足／履物の描写の量もそれに対応しているといえる。ロザネットとの関係では、彼女の無知、怠惰、趣味の悪さが彼の気持ちを一瞬の獣的快楽のあとの憎悪へと傾斜させていく。一方、代議士で且つ高名な実業家のような男の妻の愛人になること、つまり“感情教育の大学入学資格試験”⁷³としての愛においても、ダンブルーズ夫人の高慢、虚偽、エゴイズムがやがてフレデリックに情熱の幻滅感を抱かせることになる。この2人の女性は、フローベールの“パリを舞台に現代風俗小説を書く”⁷⁴という意図から、それぞれ“*demi-monde*”と“*grand monde*”を体現しているが、アルヌー夫人が感じさせる“一段と高い世界に運ば

れる心地のするあの魂の戦慄⁷⁵を彼に与えることはない。その足／履物の描写は各々2個ずつで、いずれも眼前のものの客観的、簡素な描写のなかに彼女たちの社会的身分、性格を暗示するものになっている。一方、フレデリックが“感謝の心のほとばしりに似た無言の歓喜⁷⁶”、“ほかのことは忘れきほどの無我の境⁷⁷”、さらに“宗教的な畏怖⁷⁸”さえも感じるアルヌー夫人との関係においては、夢想が絶対的優位をしめる。彼は“羞じらいはこのひとにぴったり身についたものという気がして、性が神秘的な影のうちにかくされてしまっていた⁷⁹”夫人を、“夢力の力で人間の境地の外に置いてしまっていた⁸⁰”のである。かくして、夫人の本体を追い出した“人間の境地”の跡地に、彼は夫人の代替品つまりフェティッシュを据えるのである。夫人の足／履物の描写には、眼前のほかに回想さらに空想のものが加えられる。ところで、フレデリックにとりフェティッシュは、実は、足／履物だけではなく、夫人の身につけている品物——櫛、手袋、指輪、ハンカチ、さらに体の他の部分——肩、手、指もまた彼にとり夫人の代替品なのである。そして、これらのフェティッシュはあるときはそれが擬人化され、あるときはあからさまな感情移入がなされている。フレデリックにとりこれらの物品は、“芸術品のように貴く、人間のように生気が通っている特別なもの⁸¹”であり、そのあらわな肩は、夫人と話を交わしつつもそこから瞳を離すことができず、その“肌の白さのなかに自分の魂をじっとこめる⁸²”ほどに見入り、そのためどうしても顔を合わせられないものである。夫人の小さな手は、“施しをするため、涙をぬぐうためにできているかと思われ⁸³”、夫人の外出に同伴したとき、自分の袖に寄り添ってきた皮手袋にぴったりおさまった手は、“接吻でおおいたくってたまらなく⁸⁴”なったものであり、その“一つひとつの爪の形を知っている⁸⁵”指は、1本ごとが“指というより生きた人間のように思われる⁸⁶”ものといった具合である。かような直截な形容は、足／履物の描写では、アルヌー夫人との最後の別れ場面の他にはみられない

ものである。このことは、しかし、フレデリックにおいて物品等のフェティシズムが足／履物のフェティシズムより勝っていることを意味するものではないであろう。両者の描写には量的に大きな差がある（足／履物の描写は11個あるが——添付“作品別要約”参照——、足／履物以外のフェティッシュのそれは上記のものだけである）。しかし、より本質的な理由は、最後の別れの場面で彼の口をついてでるのが、体の他の部分でも、また、かつてオトゥイユの貸別荘で夫人からもらった手袋でもハンカチでもなく、“あなたの足”であるという点にある。この台詞にフローベールが持たせようとした意味には大きなものがあるだろう。最終章で、デローリエと行う彼らの人生の総括において、一番よかったとする時代のエピソードが、15歳のときの初めて行った売春宿での失敗談であるとするならば、その前の章で、フレデリックをして“知性の無為と心情の無気力をかろうじて堪えている”⁸⁷ 状況を露呈させる具体的な何かを演じさせ、45歳の寂寥たる現状との間ではっきりしたコントラストがでるような仕掛けを用意しておく必要があるだろう。ここで必要とされる台詞は、彼自身がそれと意識していなくて、かつ読者にはそれと感じさせるような暗示的な内容のものであるだろう。その場面をつくるために、時という何人にも例外を許さない残酷な刻印をおされた老齡のアルヌー夫人を、夫の昔の借金の返済という理由のもとに、フレデリックの前に突然出現させるのである。胸をつかれるフレデリックはかつてのアルヌー夫人にむけた讃辞を口にしはじめる。しかしそのあとで、フレデリックはその性格上、かつ“教育の成果”としても、今のアルヌー夫人にたいする何らかの讃辞を余儀無くされよう。彼にとり、その対象はフェティッシュ以外にはあり得ないだろう。彼は夫人の全体像から足だけを分離させる。それは、かつての愛の表象としての、半ば非現実化された足でもあるだろう。かくして彼は言うのだ：《La vue de votre pied me trouble.》と。だが、言葉だけではコントラストは完成しない。それを言う

きの様態も必要条件である。彼はその瞬間、夢想の世界を浮遊していなければならない。台詞を口にだす彼の様態はそれゆえ “presque défaillant”（絶え入らんばかりになって）となるだろう。演技は完了する。あとは表記上のテクニックの問題である。ここでフローベールは、戯画化と同時に強調のニュアンスをだすべく⁸⁸、この台詞の伝達様式に直接話法を採用して、最後の仕上げをする。かくして、この台詞は（少なくとも本稿で見たかぎりにおいては）フローベールの自伝系列作品等における女性の足／履物の描写のなかで、当の相手に面とむかって語りかけられ、それが直接話法で載録された唯一のものとなる。フローベールはこのようにして、夢想による退行化のはてにフレデリックが辿り着いた現況を、足／履物のフェティシズムを援用しつつ描出するのである。これは換言すれば、『感情教育』のライトモチーフを象徴的に表現する手段として、足／履物のフェティシズムが使われているということを意味するだろう。フローベールはこのために2つの計算をしたのではなかろうか。その一つは、この台詞ならびに様態が突飛な感じを与えないように、足／履物のフェティシズムの描写を前もって、さりげなく随所の文脈のなかに織り込ませておくことであり、もう一つは、これに最大限の効果を持たせるべく、ほかの箇所の描写は即物的、客観的なものに抑えておくこと、である。彼が『感情教育』執筆にあたって作成した全体シナリオにも、また詳細シナリオにもこれらの意図はおろか、足／履物に関連する語句さえも記述がないが、このことは逆に、フローベールにとり、敢えて構想のレベルにまで持ち上げる必要のないほどに、足／履物フェティシズムが化肉されたものであったことを証明するものではないだろうか。

以上

脚注

1. 《L'Education sentimentale》(1869). 尚、『初稿感情教育』《La Première

Education sentimentale》(1845), 『十一月』《*Novembre*》(1842), 『狂人の手記』《*Mémoires d'un fou*》(1838), 『思い出・覚書・冥想』《*Souvenirs, notes et pensées intimes*》(1841) も含め, 題名の仏語表示は省略。本稿では自伝系列作品等の仏文の引用は『感情教育』を除き, 全て(書簡も含め) *Oeuvres complètes de Gustave Flaubert, Club de l'Honnête Homme, 1976* のテキストによる。同書からの引用は, 以下, 巻数とページだけを記す。本文及び脚注における仏文のイタリック体は筆者による。(但しルイーズ・コレ宛 1846 年 8 月 6 日付書簡の *partout* 及び 1853 年 12 月 28 日付書簡の *toute* は原文のまゝ)。

2. 《*L'Education sentimentale*》, Edition de P. M. Wetherill, Classiques Garnier, 1984, p.423. 本稿では『感情教育』の仏文の引用はすべてこのテキストによる。同書からの引用は以下ページ数だけを記す。
3. 『感情教育』(下) フローベール作, 生島遼一訳, 岩波文庫, 1989 年, p.298.
4. フレデリックがパリ脱出前のアルヌー夫人を最後に自宅に訪れたのは(第 3 部, 第 3 章) 1849 年の前半と推定される。アルヌー家に行く途中出会ったコンパンの会話に出てくる“ラトー提案”は 1849 年 1 月 8 日に行われており, その後フレデリックが参加した“王党派秘密支部”を主宰するダンプルーズに関する記述に出てくるコンセルヴァトワール事件の発生は 49 年 6 月 13 日である。(P. M. Wetherill, p.496 の注 698 及び p.497 の注 713, 716 並びに生島, 前掲書(下) p.314.)。1851 年 6 月の中頃フレデリックはロザネットの為に, アルヌーが彼女に与えた株券の代金を請求に行くが, 店の奥にアルヌー夫人が姿を現すのをみて踵を返し(第 3 部, 第 4 章), 1851 年の秋の中頃, 告訴されたアルヌーの借金返済に必要な 12,000 フランを工面したフレデリックがアルヌー一家に駆けつけるが, 今度は夫人がドアの向こうに隠れて姿を現さない。16 年振りとは, この 1851 年から数えてのものである。
5. 第 1 部, 第 1 章の冒頭の日付けは 1840 年 9 月 15 日であるがこのときフレデリックは 18 歳の青年と記されている。
6. (1) 船上の出会いの場面で娘マチルドはもうすぐ 7 歳になる, と記されている(第 1 部, 第 1 章)。
 (2) 1847 年の秋の時点で: “それに, 彼女はもうそろそろ思慮と穏やかな愛情の時期である女の秋に近づいていた”。生島, 前掲書(下) p.55. 尚モデルとされているエリザ・シュレザンジェはフローベールより 11 歳年上であった。
7. いわゆる“自伝的”と言われるものではないにしても, 一般に, 初期の作品にはその作家の性向, 体質が色濃く反映されることが多いからである。サルトルはここで引用した『この香を嗅げ』において, フローベールは“醜女マルグリッ

- トのうちに自己を投入させ”ており、『汝何を望まんとも』では、“フローベールのジャリオへの幸福な一体化が、作者の感情を仮装なしに読者に委ねる”結果になっていると述べている。『家の馬鹿息子1』, ジャンーポール・サルトル著, 平井啓之, 鈴木道彦, 海老坂武, 蓮実重彦訳, 人文書院, 1989, p.211&p.225.
8. 1830年1月1日付け祖母宛てのものから1880年5月6又は7日付けマキシム・デュ・カン宛てのものまで、日付の確定しているもの3,706通。日付の不明のもの17通, 他に短信 (billets) 39通 (Flaubert, Tome 16, Appendice) (フローベールの死亡日: 1880年5月8日)。
 9. Flaubert, Tome 11, p.658.
 10. 『フローベール全集』第7巻 (初期作品II), 桜井成夫訳, 筑摩書房, 1966年, p.118. 逆に女性を見て, 彼女が履く部屋履きを空想するという記述が『東方旅行』にある。マルセーユへ行く途中, ソーヌ川を下る船の上で見かけた若い女性に触発され, 人を見てその仕事, 故郷, 後悔, 希望など諸々を空想する, 自分の “une invincible curiosité” を告白する場面で: Et si c'est une femme (d'âge moyen surtout) alors la démangeaison devient cuisant. [...]. On pense à la chambre qu'elle doit avoir, à mille choses encore, et que sais-je? *aux pantoufles rabattues dans lesquelles elle passe son pied en descendant du lit.* (Flaubert, Tome 10, p.443.).
 11. チボーデは『フローベール論』(戸田吉信訳, 冬樹社, 昭和41年)で“もう一歩進めば病理学的と言ってもいいほどの徴候”と形容している (p.46)。
 12. Delmas, のちに Delmar に改名。
 13. Flaubert, Tome 8, p.136.
 14. 舞踏会で目の前を参加者が次々と踊り過ぎていく場面, もその一つで, これは本稿で引用した『スマール』, 『汝何を望まんとも』の他, 『初稿感情教育』(13章), 『フィレンツェのペスト』(第3章)にもでてくる。
 15. Flaubert, Tome 8, p.33.
 16. Flaubert, Tome 11, p.599.
 17. 1846年9月14日付けルイズ・コレ宛て書簡の末尾に次の文言がある: On m'a annoncé aujourd' hui que d'ici à quinze jours je recevrai de Smyrne des ceintures de soie: ça m'a fait plaisir. J'avoue cette faiblesse. *Il y a aussi pour moi un tas de niaiseries qui sont sérieuses.* Adieu, je te baise sous la *plante des pieds.* Flaubert, Tome 12, p.522.
 18. Flaubert, Tome 11, p.492.
 19. *Ibid.*, p.601.
 20. *Ibid.*, p.513.

21. 生島, 前掲書 (下) p.284.
22. Flaubert, Tome 8, p.78.
23. Flaubert, Tome 11, p.489.
- 24, 25. *Ibid.*, p.499.
26. 『フローベール全集』第7巻(初期作品集II), 飯島則雄訳, 筑摩書房, 1966年, p.20.
27. Flaubert, Tome 11, p.491.
28. *Ibid.*, p.513.
29. Flaubert, Tome 11, p.250.
30. フローベールと舞踏会の結びつきに関し想起されるのは, 彼が15歳のときに行った Pomereu 侯爵の Château du Héron での舞踏会である。この時の印象は彼に後々まで強く残り, 15年後のエジプト旅行の際, Esnèh で有名な遊女 Ruchiouk-Hânem と一夜を共にした翌朝, 彼女と別れてナイルの川船に戻る途中で, 彼はこの舞踏会のあと庭園をひとり散歩したことを思い出し次のように記している: J'ai beaucoup pensé à ce matin (Saint-Michel), chez le marquis de Pomereu, au Héron, où je me suis promené tout seul, dans le parc, après le bal: c'était dans les vacances de ma quatrième à ma troisième. そしてこの場面は『ボヴァリー夫人』のヴォビエサールの館での舞踏会の終わりの場面の構想に生かされている (Flaubert, Tome 10, pp.490-491.).
31. 生島, 前掲書 (上) p.193.
32. Flaubert, Tome 11, p.551.
33. *Ibid.*, p.323.
34. *Ibid.*, p.331.
35. この場面の考察に上記注7. ジャリオとフローベールの関係についてのサルトルの見解が参考になろう。
36. Wetherill, *op. cit.* p.163. 『感情教育』以外の自伝系列作品等に見られる“三十女の好み”については『初稿感情教育』(Flaubert, Tome 8, p.47.), 書簡ではルイ・ブイエ宛て書簡 (Damas, 4 septembre 1859, Flaubert, Tome 13, p.76.) など。
37. “pantoufle” の音声学的および語形論的な解釈として次のようなものもある: (pan)→ coup → derrière → coïter. (touffe)→ motte, gazon → pubis. (fle)→ fellation. Jacques Chessex, FLAUBERT ou le désert en abîme, Grasset, 1991, p.70.
38. Flaubert, Tome 8, p.48. “Elle disait cela lentement, étendue sur un gros

coussin de velours rouge, *les pieds posés sur les chenets*, d'un ton ennuyé et avec une figure mélancolique. p.57. “Elle releva son voile, tira un peu sa robe par le bas, et *avança le pied sur un chenet* pour se chauffer.”

39. *Ibid.*, p.40.
40. “apercevoir” が具体的かつ現実に “……が見える, をちらっと見る” の意味で使われているケースを指す。従って次のような用例はここでは除外している:
“Et il aperçut Mme Arnoux, ruinée, pleurant, vendant ses meubles. Cette idée le tourmenta toute la nuit; le lendemain, il se présenta chez elle.” (p. 143.)
41. Wetherill, *op. cit.*, p.55.
42. *Ibid.*, p.169.
43. Flaubert, Tome 8, p.75.
44. Flaubert, Tome 11, p.249.
45. 生島, 前掲書 (上) p.137.
46. Wetherill, *op. cit.*, p.83.
47. Flaubert, Tome 11, p.250.
48. *Ibid.*, p.636.
49. *Ibid.*, p.622.
50. Flaubert, Tome 8, p.40. 尚, 履物を聴覚的に据えた例として, 東方旅行の帰路 アテネからルイ・ブイエに宛てた手紙の中に次のものがある: C'en est fini de l'Orient. [...]. Quand reverrai-je les négresses suivant leur maîtresse au bain? Dans un grand mouchoir de couleur elles portent le linge pour changer. Elles marchent en remuant leurs grasses hanches, et font traîner sur les pavés *leurs babouches jaunes, qui claquent sous la semelle à chaque mouvement du pied*. (Athènes, 26 décembre 1850. Flaubert, Tome 13, p.106.)
51. 生島, 前掲書 (下) pp.74-75.
52. 同書, p.284.
53. Wetherill, *op. cit.*, p.42. “Frédéric s'était convaincu lui-même, en défendant Arnoux. Dans l'échauffement de son éloquence, il fut pris de tendresse pour cet homme intelligent et bon, que ses amis calomniaient [...].”, p.223. “Frédéric se mit à défendre Arnoux. Il garantissait sa probité, finissant par y croire, inventait des chiffres, des preuves.”
54. Petit ROBERT 1, 1980, p.2031.
55. 工藤庸子氏は『ボヴァリー夫人の手紙』, 筑摩書房, 1986 年, pp.41-42 の脚注で

フレデリックに履物のフェティシズムがはっきり認められる、と指摘されている。

56. チボーデ, 戸田吉信訳, 前掲書, p.30.
57. これら書簡の件数については Flaubert, Tome 16, pp.490 & 494.
58. Flaubert, Tome 12, p.476.
59. 工藤庸子, 前掲書, p.41.
60. Flaubert, Tome 12, p.481.
61. *Ibid.*, pp.483, 484.
62. サルトルは「そのスリッパはフローベールにとって、恋人(ルイーズ)の男っぽさが留められた姿を表しており、彼は一人で楽しむときそれを超越一対象として喜んで使っていた。スリッパには<ミューズ>の足全体が、ただし肉〔対象〕として同時に刺激的活動性〔超越〕として、要約され、化肉されている。いささかの疑いもなく、彼はパートナーの現実の存在よりも「あれやこれやの雑多な仕事」のこうした類同代理物(アナログン)の方を好むのである。パートナーはたえず彼の夢想の邪魔をするからだ。ルイーズは咎めを受け、辱められ、物質の聾啞状態に貶められ、それと同時に活動的な様子でそこにいる。従順であると同時に貧欲なのだ。何という快楽を彼は味わっていることか! また何という倒錯を」と分析している。『家の馬鹿息子II』ジャン＝ポール・サルトル著, 平井啓之, 鈴木道彦, 海老坂武, 蓮実重彦訳, 人文書院, 1989年, pp.83-84.
63. Flaubert, Tome 12, p.500.
64. *Ibid.*, p.530.
65. Flaubert, Tome 13, p.446.
66. 《Gustave Flaubert》Guy de Maupassant, 1890, Oeuvres complètes illustrées de Guy de Maupassant en 16 volumes, Des vers, Vingt-cing nouvelles inédites, Gustave Flaubert, Société Coopérative Editions Rencontre, Lausanne, 1962, p.501.
67. Chessex は前掲書, p.69 で “tes petites pantoufles” と “un petit soulier de bal en soie” を履物の片方が30年の間になくなっただけのことで、これらは同一物と信じなければならない、と主張している。
68. 《Le roman》pp.20-21. “J’ai développé ailleurs ses idées sur le style. Elles ont de grands rapports avec la théorie de l’observation que je viens d’exposer. Quelle que soit la chose qu’on veut dire, il n’y a qu’un mot pour l’exprimer, qu’un verbe pour l’animer et qu’un adjectif pour la qualifier. Il faut donc chercher, jusqu’à ce qu’on les ait découverts, ce mot, ce verbe et

- cet adjectif, et ne jamais se contenter de l'à-peu-près, ne jamais avoir recours à des supercheries, même heureuses, à des clowneries de langage pour éviter la difficulté.” in 『Pierre et Jean』, Editions Garnier Frères, 1963.
69. Flaubert, Tome 13, p.383.
 70. Flaubert, Tome 15, p.38.
 71. 『広辞苑』, 新村出編, 岩波書店, 1991 年, p.134.
 72. 『新版精神医学事典』, 加藤正明編, 弘文堂, 平成 5 年, p.641.
 73. チボーデ, 戸田吉信, 前掲書, p.195.
 74. “Me voilà maintenant attelé depuis un mois à un roman de mœurs modernes qui se passera à Paris. Je veux faire l’histoire morale des hommes de ma génération; 《sentimentale》 serait plus vrai.” (Lettre à Mademoiselle Leroyer de Chantepie, 6 octobre 1864) Flaubert, Tome 15, p.217.
 75. 生島, 前掲書 (上) p.82.
 76. 同書, p.137.
 77. 同書, p.214.
 78. 同書, p.322.
 79. 同書, p.113.
 80. 同書, p.275.
 81. 同書, p.91.
 82. 同書, p.79.
 83. 同書, p.230.
 84. 同書, p.110.
 85. 同書, p.90.
 86. 生島, 前掲書 (下) pp.54-55.
 87. 同書, p.292.
 88. 工藤庸子, 前掲書, p.230 (脚注) 及び p.161 (脚注).

作品別要約

作 品 名	制作年齢	空 想 の 描 写	回 想 の 描 写	眼 前 の 描 写
『この香を嗅げ』	14 歳		1. 若い女軽業師の闊房の描写における“可愛らしい足”の想起。	1. 2人の女軽業師の足の比較。 2. 彼女たちの足の絨毯との接触面への注視。
『汝何を望まんとも』	15 歳			1. 踊るアデルの足元への注視。 2. 死んだアデルの足への接吻。
『狂人の手記』	16 歳	1. マリアに対してする一日中の夢に出てくる彼女の足。 2. マリアの足下に全てを差し出し、その上を歩いて欲しいという願望。	1. ルーアン郊外の老女の綺麗な短靴を履いた可愛い足。 2. 座を敷けるイギリス人寄宿生達の足元への注視。 3. 海から上がってくるマリアの足と足跡への注視。 4. 同じく、海から上がってくるマリアの足と爪への注視。	
『スマール』	17 歳			1. 妻からの享樂の対象としての足。
『思ひ出・覚悟・瞑想』	18 歳～ 19 歳	1. 編み上げ靴（とドレス）についての2時間にわたる空想。 2. 理想の女性の足跡に接吻したい、彼女に体の上を歩いて欲しいという願望。		
『十一月』	20 歳	1. 靴屋の陳列ケースの繻子の短靴から王女様の足を空想し extase を感じる。		1. 初めて娼婦を訪れる道すがらの女性の踵への注視。 2. 雑踏の中で通行人の足だけを見つめ、それを体にして考えに結びつける。
『初稿感情教育』	23 歳	1. ルノー夫人の素足が踏む絨毯に誰も目を落とす欲しくないとする願望。 2. 貴婦人達の足が迫る小径の空想。	1. 旅回りの女優リユサンドの白い繻子の短靴と足への注視。	1. アンリリの部屋を訪れるルノー夫人の部屋履きと足への注視。 2. ルノー夫人の深靴と絨毯の接触音への関心。
『感情教育』	47 歳	1. 海上で幾夜もショールに包まれたであろうアルヌー夫人の足の空想。 2. 靴屋の陳列ケースの中の繻子の部屋履きを見てアルヌー夫人の足を空想する。 3. 恋歌の歌詞に触発され、アルヌー夫人の足を空想しつつ眼前の女性の装束を凝視する。	1. 船上でドレスの縁飾りの下からちらっと見えた、アルヌー夫人の華やかな絹の深靴を履いた足への注視。 2. 競売される絨毯を見てアルヌー夫人の小さな可愛らしい足を想起する。	1. 仮装舞踏会で踊る女性たちの足元への注視。 2. ルイーズの珍奇な部屋履きに対する皮肉。 3. 素足に部屋履きををつっかけるロザネットの足元への注視。 4. 椅子に反り気味に腰掛けるダンブルズ夫人の足先への視線。 5. 別荘の正面玄関の階段を下りてくるアルヌー夫人の足元への注視。 6. バリへ戻る馬車の中でアルヌー夫人の足を覆うドレスの裏への注視。 7. フレデリック宅を訪れたアルヌー夫人の踵と絨毯の接触面への注視。 8. ダンブルズ家の夜会での舞踏靴と絨毯の接触音への関心。 9. アルヌー夫人とのランデヴーのための背い繻子の部屋履きの購入と濯聖の道具への転用。 10. 競売でのアルヌー夫人の深靴の処分をみて残虐行為を感じる。 11. 最後の別れの場面でアルヌー夫人のドレスの下から深靴の先が少し出るのをみて、“貴女の足を見るとたまらなくなる”と告白する。